

2018 年 11 月 21 日 C グループ 永井佑実

志子田徹『ルポ 地域再生 なぜ ヨーロッパのまちは元気なのか?』

イースト新書 2018 年

質疑応答

A から：全編を通して実際に日本で実現できそうな政策は何だろうか。

第一章で取り上げられた「バル」は既に立川など各地で取り組みが始まっている。

函館では、日本流の「はしご酒」と町の活性化を結び付け、地元産の食材の良さを広げる活動を行っている。

第二章で、台東区谷中にて下町の景観や谷中らしさを残すため、空き家を使うアルベルゴ・ディフーズを実現し、宿泊施設やレセプションに再活用している。

第四章で、日本に沢山の地熱エネルギーが眠っている。

第六章で、品種改良の分野において日本は世界で戦っていけるほどのレベルである。

地域の人々が一丸となってその地域の特色を生かせば様々な政策が実現可能である。

B から：「地域の地域による地域のための取り組み」（253 頁）について筆者は日本の打開策について述べているのか。

日本全体で人口が減少している現在、自治体間で人口を取り合っても地域再生の展望は開けない。筆者は中央集権型の地域振興策ではなく地方が主導の取り組みを積極的に行うべきと述べている。

D から：日本の地方でまちづくりを行ったら一番活性化しそうな地域はどこか。

- ・ どの地方でも活性化の可能性を秘めている。
- ・ 交通の便が悪くても、その地域に魅力を感じるところがあれば人は訪れる。
- ・ どのようにしてその地域にしかできないことを見極めていくかが大切。
- ・ 危機的状況の本質と向き合って脱却に真剣に取り組むことで持続可能な強い街になる。

ex 新潟県長岡市は特産物「こしひかり」や日本一の花火が打ちあがる「長岡祭り」、ラーメンの激戦区であること、東京からのアクセスのしやすさなどを武器に地域が活性化することに期待できる。